貨狄像傳來徑路の想定

新村出

貨狄樣の名を以て知られる蘭船リーフデ號の船尾のエラスムス像の傳來の徑路に關して推考を述ぶるに先ち、私はこの船を合はせた五隻で東洋に向つた和蘭船隊のことに就いて一言したい。但し既に村上博士及びノウホイス氏 Nouhuis の發表もあつたことであるから茲では極簡單にしておく。

Mahu の率ゐた五隻の和蘭艦隊のうち、第一は提督マヒューが乘組んだ De Hoop(希望)號で旗艦であつたが、第二の Liefde 號(慈愛)すなはち舊名エラスムス號は副旗艦をつとめ副提督の Sim. de Cordes が坐乘した。第三は Het Geloof 號(信仰)といひ、第四は De Trouw 號(眞實)といひ、第五が De Bliede Boodschap 號(好使命)と呼ばれた。

この中で途中で歸航して無事に本國に着いたのは第三の信仰(ヘローフ)號一隻だけで、ともかくも極東まで漂來したのは、この慈愛(リーフデ)號のみであつた。第一の希望(ホープ)號は慈愛(リーフデ)號と共に布哇あたりまで同航したらしいが、途中覆沒して、我がリーフデ號のみが離れて日本に着いたのであつた。他の二隻卽ち第四船第五船は南米の南端を回はつた後、西人や葡人の南蠻黑船の手に奪はれてしまつた。かゝる始末であるから日本に到來した唯一隻の遺物として、あの貨狄像に對して蘭人が異常の望をかけるのも尤も千萬である。況んやその像が出帆地たるロッテルダム出身の學僧として名高いエラスムスの木像であつて、その船がエラスムスの名を冒してゐた

因緣あるに於てをや。

貨狄像の手にせる卷物に1598と刻してある如く、この般はその年すなはち慶長三年に造られ、艦隊に編入される關係上初名のエラスムスをリーフデと更めて船名を統一し、他の四隻と共に南米を廻つて東洋に派遣されたのは、同年の六月二十七日であつた。艱難多かりし一年九ケ月餘を經て、生存船員も殘り少なになつて辛うじてわが豐後灣に漂來したのが出發の翌々年の一六〇〇年四月十九日であつた。慶長五年の三月六日のことであつた。やがてリーフデ號は堺港に回航されたが、それに先ちてパイロット役の英人アダムスだけは日本船で大阪に連れて來られ當時大阪城の西丸に居た家康に召見されたのが五月十二日(陽曆)卽ち慶長五年三月三十日のことであつた。家康から來航の始末や海外の近狀など色々の事を質問されたが、禁錮凡そ數十日間に及んだ。前後三回取調を

受けたが、その間にリーフデ號は豐後から堺へ回航され、アダムスも赦されて堺に歸船することゝなつた。家康が上杉景勝征討のため東征の途に就いたのが六月十六日(陽曆七月二十六日)であつたから、アダムスの解放はその少し前のことであつたらう。家康の江戸城歸着が七月二日、十九日に征討軍出發、二十一日に家康の親征、それから九月二日關ケ原役となつた。アダムス歸船後三十日程してリーフデ號は堺から江戸灣に回航せしめたが途中海難に遭つて船を損じ漸く浦賀に到着した。豐後や堺港で既に貨物や積載物や所有品を或は掠奪され或は沒收されて散々の態であつた。當代記卷三慶長五年春の條に記して云ふ。

去春、船堺浦に寄、是はイギリスと云島船、黑船（葡西船）の敵也と云々、然間船中に具足大鐵砲數多有之、具足は膝より上計也、內府(家康)見物し給、上下見之を、さて猩々皮以下令賣買、無異儀令歸國、彼船爲唐

船の敵間、可令誅罰物をこ人皆云之。

イギリスの島の船とあるは、召喚されたアダムスが英人であつたから蘭船を英船と間違へたものであり、異儀なく歸國せしむとあるは、アダムスを大阪より歸船させリーフデ號を堺から出港させたのを誤解したのである。積載物のうち具足の處分のことが見えて大砲をいかに處置したかを明記してない。マードツク氏はその日本近世史四六三頁に、リーフデ號の大砲十八門又は二十門を關ヶ原役に利用したかも知れないと記るしたが、それは絶對不可能ではなかつたではあらうが、實際至難であつたらう。船を浦賀に回航した後、その備砲を陸上げせずにそれを更に海路伊勢灣へでも運搬すれば、關ヶ原戰役の間に合はないこともなかつたらうけれども、當時の水陸の運輸力で可能であつたか如何、私は疑はざるを得ぬ。或は他の良法が取られ得たか如何、私は直にマードツク氏の見解に贊しかねるのである。

アダムスはその書簡中に、リーフデ號の最期については何等記るす所がない。たゞ船員三四名が艦長と彼とに背いて去つたこと、凡そ二年間經過するうちに彼等は船を棄てゝ當國に在住するやう命ぜられたこと、家康より在留船員に米や金を賜はつたこと、四五年間するうちに八十トンの新造船を家康の命によつて造つたこと、測地法や算術等の學藝を敎授したこと、五年目の終りにアダムスは歸國して妻子に逢ひたいと懇願し更に蘭英二國との貿易開始を獻策して派遣せられんことを申出したが許されなかつたこと、漸く艦長(カピタン)クワケルナツク Quackernack が日本の船でバタニ(太泥)へ航行することだけが許されたこと、かういふ經緯を略叙してあるだけである。さればリーフデ號が浦賀から歸航しなかつたことは確かであり、從つて船體がいつしか自然朽廢乃至沈沒するに至つた

か或はそれを解體してしまつたか二者いづれであるか不明であるにもせよ、その遺體が浦賀邊に殘留してゐたことは事實としてよい。

家康が關ヶ原戰後初めて江戸に歸つたのは一年餘を經た慶長六年の冬であつた。それまではリーフデ號及艦員の處分は閑却されたに違ひない。アダムスの書簡にも、在留二年間に船員の離反とその後の扶持とを記るしてをるが、アダムスの造船及學術教授の事たるや、慶長七年八年乃至九年あたりの二三年間のことゝすべきであらう。かくてクワケルナツク等の平戸より南航したのは慶長十年（一六〇五）の秋のことであつて、同年の陽曆十二月二日にバタニに着いたとある。果して翌年の慶長十一年十月十日附で和蘭人に貿易許可の朱印狀が下附された。然るに憐むべしクワケルナツクは第二エラスムス號の艦長として同年八月に戰死してしまつた。

以上最後の一ヶ條を除き主としてアダムスの書簡に據つたが、通航一覽卷二三九（刊本第六冊）阿蘭陀國部一、入津通商の條によると、異船が豐後漂着のことを言はず一躍直に堺へ入港のことを言ひ、家康が船員を大阪に召見したことを錄せず江戸に喚問したとのみ出てゐる。本船が風波のために浦賀に打寄せて破船したことを書いてゐる。慶長十三年（一六四八）の條を見ると、蘭船が平戸に入津し嚮に日本に漂來した船（リーフデ號）の消息——實は船員の安否——を尋ねに來たことを記るした。引く所の記錄には、或は「先年紅毛より始て日本へ渡海仕候船、于今歸國不仕故、彼等行末を相尋候はんため」ともあり、或は「其船行方不相知諸方を尋るに日本に在留し居る由承り傳へし」由ともある。さればリーフデ號の日本殘留は、アダムスの書簡と照して誤ない。

次に通航一覽（刊本第六冊）卷二五二、諳厄利亞

國部一にも略々同樣な記事があり、三浦安針アダムスの閲歷の一部が見えてゐる。同所に引用せる相中留恩記略といふものを見るに、リーフデ號の遺物等に關する重要な資料がある。相中留恩記略は、內閣文庫（一六五〇七號）の藏本二十三卷目二卷合二十五冊あるが、私は未だそれを見ず、わづかに帝國圖書館の藏本（二四四の三一八）一冊本を檢しただけであるが、さまで古い確實な記錄とは云へないけれど、又徵證とするには足る部分もある。今その本に由ると、

三浦安針屋敷跡　逸見村

三浦安針屋敷は逸見村の中程にて淨土眞宗淨土寺の南にあり、今は畠地となれり、傳へいふ安針は朝鮮の人にて本朝に歸化し三州（○今按ずるに三浦の誤寫か）に住す、炮術に妙を得其術を諸士に相傳す、よりて東照大神君樣に拜謁し奉り關東御打入（○今按、これは關ヶ原役後の歸城か或は征夷大將軍就任の後なごを誤りしものと解すべきだ）の後當時にて二百二十石の知行を賜はれり、故に三浦を氏とす、又江戶にて邸宅を賜はれり、今の安針町是れなり、後當村に住居せり。（下略）

右の所錄中で大切なるはアダムスが朝鮮人であるといふ誤傳と、砲術に妙を得て其術を諸士に相傳すとある傳說と、この二件である。異人を唐人といひ高麗人といつたことは普通であるが、慶長時代には、征韓の役後のことではあり殊に捕虜が各地に散在してもゐた時分だから、無智の都鄙人がアダムスを朝鮮人と呼んだこともあり得べき事である。又アダムスは一航海士ではあつたが、當時の日本の有樣では西洋人の技術はいかなる淺薄未熟のものでも日本人に比して一日の長を有し我國に在つては之を利用せねばならなかつた時勢であつた。現にアダムスをして强ひて造船をさせた例もある以上は、彼をして砲術を敎へしめること

位はあつたに違ひない。或はアダムスを介して殘留の蘭人をして砲術を幕府の諸士に敎へしめたことは有り得る筈だ。少し後だが寛永二十年奥州南部の海濱に漂着した蘭船の船員を捕へて江戸に置いて砲術を敎へさせた例もあつた。それは天草の亂後數年のこと、これは關ヶ原役後數年のこと、而して尙大阪役の豫想もあつた筈である。アダムスがそれを敎へた年代は、慶長年間であるとする方がむしろ事實に近い。而してマードックの所說を敷演すると、リーフデ號の大砲約二十門は關ヶ原役よりもむしろ大阪役の方に利用される可能性が多いと私は思ふ。いづれにしてリーフデ號の大砲のこと、船員が砲術を授けたこと、一は前記の如く當代記に見え、一は時代も史價も下る相中留恩記略に傳へてゐる所から推察すると、アダムス或は殘留の和蘭船員がリーフデ號の大砲を外づしなどして、或は別の大砲によつて、幕府の砲術士

を敎導したといふことは考へ得べきことである。

アダムスを朝鮮人と誤解した俗衆の傳說には新しい文獻ながら更に一つの徵例がある。外交志稿卷之二十歸化移住篇四、慶長五年異船堺港入津尋で浦賀破船のことを記るした後、一書に、安針は英國人ウイレム・アダムスと稱す、紀元千六百年チヤリテー船に搭じ紀州浦に漂着し土民の爲に害せられんを恐れ僞て朝鮮人と稱し救助を請ふと出てゐると註した。新しい信じ難い文獻ではあるけれど、慶長十八年（一八一三）に英國の甲比丹セーリス渡來のときにも、彼等英人は屢々高麗人と目された由が、その日記に書いてあるのをも參考すると、アダムスが殊に三浦あたりの片田舍で朝鮮人と思はれたこと丈は信じいよいと思ふ。自ら朝鮮人と稱したといふことは斷じて誤りであらうし、紀州漂着のことは、豐後の誤りにちがひないが、右の一點だけは參考にするに足りるのである。

以上の如くリーフデ號の成行とアダムス等の事情とを調べておいて、その船の船尾像、それがエラスムス像であることは和蘭がはの記錄に載つてゐることはWieder博士の著書にも見えてゐる所であるが、私はそのエラスムス像がいかにして牧野家に歸したのであらうかといふ傳來の徑路を想定してみたいのである。

寛政重修譜卷六五二(刊本第四輯四六〇頁)田口氏牧野の條下、傳藏成里(シゲサト)の閥歷を抄してみると左の如くである。

(成里は)そのゝち織田信雄につかへ、また所緣あるにより長谷川藤五郎秀一(秀一の妹を納れて成純を生めり)に屬し文祿元年朝鮮の役にしたがふ、秀一陣中において卒しけるとき、諸將成里を推擧す、これより太閤の命にて秀一が士卒を下知し所々において軍功あり、歸朝のゝち豐臣秀次につかふ、これよりさき朝鮮の晉州(ちんしう)において鼓および貨狄の像を得てかへる、秀次事あるのゝち石田三成に屬す、慶長五年關ヶ原の役に三成敗北のとき、池田輝政が軍にくはゝる、輝政東照宮に言上し扶助す、これより剃髮して一樂齋とあらため、輝政が領地播磨國に住す。

文祿の役に成里が朝鮮晉州に於て鼓及び貨狄を得てかへるといふには、二つの誤がある。いはゆる貨狄のエラスムスには一五九八(慶長三年)の年號が彫刻してあるから、これは文祿元年(一五九二)乃至二年の役の獲物とするわけにはいかぬ。鼓及び貨狄とあるのは、船舶の創始者たる傳說の共鼓と貨狄との二人を誤讀したものに外ならぬ。要するに蘭船の船尾像をば貨狄の像と附會しただけのことである。譜には更につゞけていふ。

八年(慶長)御上洛のとき伏見において仰をかうふり江戸に下向し台德院殿(秀忠)の御前にめされて還俗して再び傳藏にあらため幕下に近侍す、この歲下野國梁田郡のうちにおいて采地三千石をたまふ、その後東照宮江戸に渡御のとき、仰せにより傳藏の名を三男成純に

ゆづり、成里は伊豫守にあらたむ、十一年(慶長)御持筒の頭となり、同心五十人をあづけらる、十九年四月二十三日死す、年五十九、采地羽田村の龍江寺に葬る。

以上の如く彼元來三河の武士であつたが、織田豐臣二氏に仕へ又秀次三成の如き輩に屬したが、遂に輝政の介によつて德川氏の直參となつた。それは慶長八年(一六〇三)家康が征夷大將軍に任ぜられた年であつた。リーフデ號の艦長クワケルナツク等が未だ歸航せず、江戸か浦賀かに滯在してゐた頃である。さてその翌々年に家康が辭職して秀忠が襲職した歲、クワケルナツク及びサントフオールド等の蘭人は江戸から平戸を經てバタニに向つたのであつた。アダムスは尙ほ關東に留まつてゐた。その翌年の慶長十一年(一六〇六)に、牧野成里は幕府の御持筒頭となり同心五十人を率ゐることゝなつた。それから約八年勤仕したわけである。彼は大阪役の起る歲の十九年四月に命を終つたのであるから、むろん役には出陣しなかつた次第である。

その子の傳藏成純は、父の死後遺領を繼いだが、御書院番となつて大坂役に從軍し、元和元年夏の陣にも出征した。寬永九年御使番となり、十四年御目付に代りて豐後府內に出張中、島原役が起つたので、軍監となり功を顯はした。然し父の如く御持筒頭のやうな職を勤めなかつた。木村高敦の武德編年集成卷五十一、慶長十年十二月の註には、牧野成里が砲卒五十人の隊長として江戸城大手門を守つて子成純を携へ家康の歸城を迎へた時、父子家康から賞辭を賜はつた話が出てゐる。

持筒頭は元和九年には三人あつて三組を支配し後四人に增し幕末には五人にも增員された。各組與力十騎同心卒五十人ほどあつて、その頭は若年寄の監督で千五百石の役高を得、江戸城の諸門の警衞に任じた所の重職であつた。持筒組は鐵砲を

携へた歩騎兵の小部隊であつて、砲兵隊ではないのであらうが、時に大砲發射にも任じたのであらう。當時の軍隊組織では、持筒頭は主として小銃兵の隊長であつて砲兵の隊長ではないのであらうが、必ずや砲兵隊長の役目をも勤めたのであらうと思ふ。されば前記の如く、アダムスが砲術を幕府の諸士に授けたといふ傳說でも、若しその記載を活かして使ふならば、持筒頭やその同心がアダムス乃至蘭人から銃砲發射の技術を敎はつたと解してよいのではないかと考へられる。而して持筒頭の成里が朝鮮より貨狄を得たといふ傳說を活かして文祿征韓役(一五九二及三年)といふアナクロニズムだけを棄てるならば、その貨狄像は、砲術練習の際に、アダムスなり蘭人なりから得たのだと解することが極めて自然であると思ふ。

寛政重修譜に見ゆる牧野成里が貨狄を得た話の根本出典は私の未だ檢せざる所である。野史卷二三九には、牧野家譜といふ引用書があるが、さういふ記錄を調べたならば、或は確かめられるかも知れない。又相中感恩記略の如き後世の編纂物などをも便宜利用して、事實の矛盾なき範圍内に於て事實の斷片を綴りあはせて考察すると、貨狄像は慶長十年代に於て、和蘭船員より砲術傳習を受けた機緣の徑路によつて、持筒頭たりし牧野成里の手に歸したものと考へてよからうと思ふのである。私はこの想定には、尙少許の間隙(ギャップ)はあるにしても、當らずとも遠からざる推定であらうと信ずる。(昭和三年八月二十九日稿)